今週の相場はどうなる？

作成者：山根亜希子

○8月26日～

先週の為替相場はやや円高に振れてマーケットが終わっています。
先週末のジャクソンホールでの講演でパウエルFRB議長が「政策を変更すべき時が来た」と9月に利下げをする可能性を示唆しました。
これまで米国は、労働市場は比較的堅調で、インフレがやや心配な状況でした。
しかし、状況が変わり、インフレ率は下がってきましたが逆に失業率が上がってきています。
さらに、先週発表された2024年度の雇用統計の年次改定の推定値が81万8000人も下方修正されました。これは2009年以降で最大の下方修正となっており、労働市場が思っていたよりもかなり悪化している可能性が出てきました。
8月5日の日本株の大暴落も8月2日発表の米国雇用統計（7月分）が予想より悪かったことも引き金になっていることを考えると、今後は雇用情勢や実体経済がどうなっていくかが重要になってきそうです。
9月の米国の利下げは確実視されていますが0．25%の利下げなのか0．5%の大幅利下げになるのかはまだわかりません。
今後のデータ次第ということで、マーケットが落ち着いていれば0．25%、想定以上に指標が悪化して、マーケットが不安定な状況になっていれば0．5%の利下げになるかもしれません。
また、日銀は方向性としては利上げを考えていることに変わりはなく、マーケットが安定していれば年内にもう一度利上げを行うかもしれません。
日米の金融政策が日本は利上げ、米国は利下げとはっきりしたことで、ファンダメンタル的には円高ドル安のトレンドとなる可能性が高く、すでにドル／円は144円台前半まで下落しています。
週明けもまだ円高が止まらない場合は注意しないといけません。
この流れが加速すると株価にも影響がでて、再び日本株が大きく下落するというシナリオもありそうです。そうなるとクロス円も含めて、リスク回避的な動きが広がり、荒っぽい動きになる可能性があるためリスク管理はしっかりしておきたいです。
今年の春以降、日本は利上げ、それ以外の先進国は利下げに動き始めた国が多く、クロス円も今までと違って下落しやすくなっています。
テクニカルでもトレンド転換となる可能性が出てきたため月足、週足を見ながら流れに沿った取引をしていきたいです。

● テクニカルで見た重要ポイントは？

＜ドル／円＞

Copyright© （有）ユビキタストレーディング All Rights Reserved

今週の相場はどうなる？

先週のドル／円は円高がじわじわと進み、週明けに148円だったドル／円は144円あたりまで下がってきました。
お盆に149円台をつけたところを天井に円高の動きが続いています。
8月6日安値の143．6円を割り込むと5日の安値の141．6円までサポートが少なく、143．5円割れの動きが出れば円高が加速するリスクがあります。
もし、141．6円も割り込む動きとなれば140円あたりがサポートとして意識されます。
上値は146円あたりにレジスタンスラインがあり、ここを超えることができない限り、円高が進みやすくなります。
今後は、戻り売りも考えながらトレードしていきたいです。

＜気になるクロス円＞

クロス円も先週は上値が重い状態が続きました。
NZドル／円はチャートの形が日経平均のような形になっており、日本株とクロス円の連動が強くなる可能性もあります。
米国株は利下げを好感して上昇しても日本株はドル／円が下落する円高の動きが出れば下がるリスクがあり、米国株より日本株と連動する動きを見ておいた方がよさそうです。
日足だけでなく、週足で陰線になった場合は下落リスクが高まっているため警戒が必要になります。

＊クロス円とは円との通貨ペアの総称：〇〇／円というような通貨ペアのことです。

＜今週のファンダメンタル？＞

日本では8月東京都区部消費者物価指数、7月鉱工業生産などがあります。
米国では7月耐久財受注、6月ケース・シラー米住宅価格指数、8月消費者信頼感指数、8月リッチモンド連銀製造業指数、4－6月期GDP（改定値）、前週分新規失業保険申請件数、7月住宅販売保留指数、7月個人消費支出（PCEデフレーター）、8月シカゴ購買部協会景気指数、8月ミシガン大学消費者信頼感指数などが発表されます。
欧州ではユーロ圏とドイツで8月消費者物価指数、ドイツで8月IFO企業景況感指数、4－6月期GDP（改定値）などがあります。
ほかには、オーストラリアで7月消費者物価指数、小売売上高、カナダで4－6月期GDP、6月GDPの発表などがあります

Copyright©（有）ユビキタストレーディング　All Rights Reserved